

# 啄木：その静謐な佇まい

Ishikawa Takuboku : The Silent Scenes

水 野 信 太 郎

Shintaro MIZUNO

北翔大学教育文化学部研究紀要  
第4号 2019

## 啄木：その静謐な佇まい

Ishikawa Takuboku : The Silent Scenes

水野 信太郎

Shintaro MIZUNO





作品ー 1 北海道倶知安町の丘にたつ静かな啄木歌碑



作品ー 2 倶知安駅前の広場（東出口）と啄木の歌碑



作品-3 札幌駅北西の下宿跡ビル1階にある啄木像



作品-4 小樽での別れを歌った切ない妻の眉の歌碑



作品-5 明治41年1月20日に啄木が目にした煉瓦造



作品－6 函館での淡く美しい思い出「鹿子百合」の碑

明治40年9月、函館の大火によって職場を失い焼け出された石川啄木は倶知安を通過し、札幌で僅か2週間を過ごしたものの、やっと小樽に腰を落ち着かせるかと思われた。さにあらず、残念な躓きが続く。その年の暮れにはまたもや失業、まるで貧しさに取りつかれたかのようにであった。

作品－1と2は啄木が旅路の途中、垣間見た倶知安に建つ2基の歌碑である。前者は駅から少し西側の小高い丘にたつ。選ばれた歌は「馬鈴薯の花咲く頃と／なれりけり／君もこの花を好きたまふらむ」。決して派手ではないものの清潔感たどよう歌碑である。後者は駅前広場（東口）の一角である。5行書きで「真夜中の／倶知安驛に／下りゆきし／女の鬢の／古き痕あと」が刻まれている。

なお同駅は北海道新幹線の札幌延長工事によって姿を変えざるを得ない。駅舎を挟んで反対側（西方向の駅裏）には倶知安機関支区時代のC62型蒸気機関車に対応可能であったターン・テーブル（転車台）が残されている。また作品－2の遠景に位置する建物群は、すでに新幹線の用地として立ち退きが決まっているという。

札幌の下宿で啄木が、一晚目（明治40年9月14日）から「わがが宿の姉と妹のいさかひ」を聞かされた場所は現在、札幌クレストビルとなっている。その公道に面した1階には作品－3のような啄木像がある。銘板には、しめやかなる恋の多くありさうなる郷なり、詩人の住むべき都会として、札幌を記した文言が見える。

小樽駅の駅前広場を見下ろす段上にも大きな歌碑（作品－4）がある。妻・節子が長女・京子を背負いながら、単身で釧路に赴く啄木を見送る姿が痛々しい。「子を負ひて／雪の吹き入る停車場に／われ見送りし妻の眉かな」そのままである。作品－5は小樽で妻子と別れた啄木が、次姉夫婦の岩見沢駅長官舎に宿泊した翌朝10時過ぎに旭川へ向かって発つ際、目にしたであろう大きな赤煉瓦の建築である。今なお岩見沢駅の裏側・北西に隣接して現存する。この建築物は竣工（明治32年頃）後10年足らずの鉄道施設であった。

鉄道から離れて、ひっそりと佇む碑もある。現岩見沢市内の北村に鹿子百合・橋智恵子の碑がある。右端の石柱には「石狩の空知郡の／牧場のお嫁さん…」と刻まれている。函館での清らかな記憶である。